

年会長挨拶

第39回日本分子生物学会年会の開催にあたって

第39回日本分子生物学会年会
年会長 一條 秀憲
(東京大学大学院薬学系研究科)



2016 (H28) 年度の日本分子生物学会年会は、「半端なベクトルに出口無し! ~徹底した基礎研究から広がる応用~」というテーマの下、11月30日(水)~12月2日(金)の3日間、パシフィコ横浜において、国内外の演者による114枠のシンポジウム、約3000題のポスター発表、各18枠のランチョンセミナーとフォーラム等による国際色豊かで活発な情報交換の場を提供するとともに、最終日には「ゲノム編集は生命観を変えるか?」という分子生物学会らしい市民講座が開催されます。

これまで「年会のコンセプト」の中でも繰り返し申し上げてきましたが、本年会のもっとも重要なミッションは、「基礎研究に徹する」ことの楽しさ、大切さ、素晴らしさを(再)認識する機会を提供することです。

その特徴をいくつか挙げますと、これまで分生単独開催の時にはなかった特別講演枠(プレナリーモーニングセミナー)を設定し、まさに基礎研究に徹して偉業を成し遂げて来られた先生方に、自由なテーマで講演をお願いしました。また、厳選された分生らしいシンポジウムだけをシンプルに配置するとともに、これまで指定シンポジウムに限られていた海外招聘演者への旅費支援をシンポジウム枠すべてに拡大することで、国際化の推進を試みました。一方、使用言語に関しては、緩やかな国際化と深みのあるディスカッションの両立を目指し、英語セッションにおいても質疑応答は臨機応変に「日本語も可」を推奨しています。

また、分生最大の特徴ともいえる熱気溢れるポスターセッションでは、4分発表3分質疑応答の持ち時間を座長に仕切っていただくことで、前後のフリータイムでの白熱した議論を誘導する狙いです。さらに、誰がポスター発表者なのか名札を探し廻らなくても済むように、ポスターに顔写真の添付をお願いしました。そして・そして、ポスター会場でのミキサー(!)。今ときではないかもしれませんが、好き嫌いもあると思いますが、海外では当たり前(?)のアルコールの力もちょっとだけ借りて、サイエンス議論を盛り上げることに挑戦します。

最後になりましたが、寄付・展示・広告等にご出捐いただいた企業・団体の皆様に感謝するとともに、年会準備に携わって下さったすべての皆様に心から御礼申し上げます。特に、プログラム委員(村田茂穂委員長)ならびに組織委員(三浦正幸委員長)の皆様には、約2年前から幾度となく会議やメールによるディスカッションに参加していただき、企画構成に関わるさまざまな作業にご尽力いただきました。また、たいへんお忙しい中、ポスター座長をご快諾いただいた300名近くの先生方のご協力無しには年会の開催に至ることはあり得ませんでした。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

それでは、もうすぐ皆様と *Yokohama* でお目にかかれること、楽しみにしています。